

氏 名	みな お ま や 皆 尾 麻 弥
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 425 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	文 学 研 究 科 文 献 文 化 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	Reading Nabokov's Framed Landscape ナボコフの散歩道を辿る——切り取られた窓辺の風景への誘い
論文調査委員	(主 査) 教 授 若 島 正 教 授 佐 藤 昭 裕 准教授 佐々木 徹

論 文 内 容 の 要 旨

第一章：ナボコフの風景画

1. 白い筆記用具

ナボコフの自伝『記憶よ、語れ』の中で著者が回想する、幼いナボコフ少年が 人差し指で枕の上に描く Vyra への並木道を出発点にして、目に見えない絵・色という概念について考える。人差し指はナボコフの筆記用具の原点となり得るという可能性を、白い色鉛筆の挿話も含めて論証する。無色透明の筆記具、またそれによって描かれた絵がいかに「オリジナル」に忠実かということ、また無色の筆記具があらゆる筆記具の中で最も色彩豊かで想像力を邪魔しないものであるということ、主に自伝と『賜物』における挿話を詳細に検討することで証明する。

2. ナボコフとエクプラシス

ナボコフが作品中で言及している視覚芸術作品は、膨大な数に及ぶ。D. Barton Johnson の著書が示すように、ナボコフ作品と絵画というテーマは最近のナボコフ研究において比較的注目を集めるようになってきた。ここではナボコフの作品中での絵画の使い方に踏み込んでみる。まずは、ナボコフ自身が本を読むときに欠かせなかった、挿絵を作ってみるという作業に焦点を当てる。本の挿絵を翻訳の一形態として考え、『エヴゲーニー・オネーギン』の中で彼がこだわっている挿絵の問題にも触れる。さらに、文章から絵に翻訳する、ということと反対の作業として、絵を文章に翻訳する(前節で焦点を当てた、自伝の中で著者ナボコフが五歳時に指で描いた絵を文字で再生するというのもまさにその一例)というナボコフの得意技の意義について、『記憶よ、語れ』と『賜物』を中心に考える。おしまいに、ナボコフが言及したとしても何の不思議もないにもかかわらず言及しなかった画家、エドワード・ホッパーに触れる。Alain de Botton が *The Art of Travel* の中で、ホッパーがアメリカの道沿いの散文的な風景の中にいかに詩情を見出したかということについて語っているが、Botton のその描写自体が奇妙なことに、あたかもナボコフの作品世界、特に『ロリータ』のことを言っているように、ナボコフ読者には見えてくる。鉄道風景と窓の風景に魅せられた画家としてとらえることで、いかにナボコフ作品中の隠れた「オリジナル」に成りえたかということを論じる。絵画と文学作品の関係を扱った Botton の文章、特にホッパーの章を導入することによって、次章で扱う「窓」、「汽車の窓からの風景」というテーマへ続ける。

第二章：窓から見るナボコフ

1. 窓の景色

第一章で触れた、多くの窓の景色を踏まえて、ナボコフ作品の中でいかに窓が重要なモチーフとして使われているかということを証明したい。この節では、自伝を中心として、ナボコフの様々な作品の中に現れる窓の場面を仔細に読みほく。

2. 車窓風景

窓のモチーフはさらに、車窓モチーフとして発展する。自伝、短編を中心にして、このテーマを詳しく論じる。

3. フォードルと窓

本論文の焦点に据えている『賜物』に登場する窓の風景に絞って、この作品中での窓の使われ方についてまとめる。ここでは、窓のモチーフがいかに『賜物』における「視覚」のテーマと分ちがたく結びついているかということを主に論じる。

第三章： フォードルのベルリン地図

1. フォードルの見たベルリン ―辻公園を中心にして

まずは前章との関連で、*Pale Fire*の、窓から外を覗くキンボートのイメージから出発して、彼がいかにその窓辺の景色から自分の住む建物と隣人シェイド家との位置関係、さらには近所の地形図を描き出そうとしているかということに触れる。また、彼の城の地図への愛着なども含めて、地図作成への導入とする。『オネーギン』や文学講義の中でナボコフが見せる地勢への強い興味なども、この章の裏付となる。この節では、小説中に点在する辻公園をたどっていくことによって、いかにこの街が複雑に構成されているかということを証明する。ここで明らかになるのは、どの辻公園がどの辻公園と同一であるのか、またこの小説中、正確にはいくつの公園が現れるのか、特定できないということである。主人公（そして将来はこの小説自体の語り手であるかもしれない）フォードルの、「物と物とのつながりが認識できない」という特性をもとにして、街の一つ一つのあるまとまった空間（公園、通りなど）がどれも繋がらずに、別々に存在しているように見える点などを強調し、結果として、この小説をもとにしてベルリンの地図は作成できないということを論証したい。さらにはフォードルの土地認識と対照的を成す、チェルヌイシェフスキイの地図への執着についても触れる。

2. ベンチのテーマ

前の項で明らかにした辻公園から、さらに細かい部分に焦点を絞るという意味で、ベンチのテーマを考察する。ナボコフ生涯の作品を通して目立たぬながらも配置されるベンチの周辺には常に、作者の実に丁寧な筆致が感じられて、単なる小道具として一様に看過するのは余りに口惜しい。とりわけ『賜物』において随所に現れるベンチは、読者をしばし立ち止まらせずにはおかない。それらはただ気紛れに設置されているわけではなく、個々のベンチ場面は概して語りの形式上見逃せぬ問題を孕んでいる。この節では今まで顧みられることのなかったベンチをナボコフ文学の特殊な装置として再認識しようとする試みである。『賜物』を中心に、ベンチ場面がいかに語り手と主人公の意識の問題を顕在化させているか、いかに語りの操作を強く意識させる場であるかということ、語りにおける人称の変化と併せて考察する。更にベンチの重要性を証明するために、初期作品の分身テーマとの関わりを明確にする。この分身テーマが後に語りの人称の複雑化へとつながり、更には語り手による描写を貫く複雑で特殊な時間の観念を導くに至る過程を、ベンチ場面を検証することで明確にしたい。

第四章： フォードルと歩くベルリン―歩行小説としての『賜物』

1. はじめの入り口―郵便局

前章から見てきた、ベルリンと『賜物』という作品の断片的な地形図から、さらに入口と出口というテーマを導き出す。この作品には多くの「入り口、出口」のモチーフがあらゆる形で潜んでいる。まずは、この本の最初の日、主人公フォードルが越して来た初めての通りのことを語り手は「ちょうど書簡体小説のように、郵便局で始まって教会で終わる」と表現している。この郵便局は従って、最初の通りの入り口であるとともに、この本自体の、最初の入り口にもなり得ている。ナボコフの小説の中で、手紙というのは頻繁に用いられる小道具である。書簡体小説とまではいかないものの、手紙が大きな役割を果たしている作品が意外にも多く見つかるのである。このテーマについては、これまでそれほど熱心に議論されてこなかったのであるが、ナボコフの作品世界で果たす役割を考えれば、当然ながら焦点を当てられるべきものである。まずはナボコフ作品全体を視野に入れて、手紙モチーフの概観を述べる。その後、『賜物』中の手紙の使われ方を論じるが、そのうち最重要であると思われるものが、小説中最後にフォードルが認める、母親への手紙である。この特別な手紙を詳細に読みほどくことによって、フォードルとベルリンの街（とりわけ夜のベルリン）との思いがけない関係を明らかにする。さらに、この手紙こそがこの『賜物』という本の、隠された最初の入り口、出発点になっているということを証明したい。

2. さらなる入口と出口の探索

この小説を「歩行」の小説と名付けるべく、入口出口のテーマをより深く探っていく。このテーマが、いかに『賜物』に

おける「歩く」という重要な行動と結びついているかということをも明らかにする。「歩く」という動作、「痕跡」のテーマ等と絡めながら、入口出口がどのようにこの作品の中で働いているかということの詳細に論じる。この節のおしまいで触れる入口出口のある公園、通りは、ベルリンの、現在のものであるというふうにも解釈できるし、また同時に過去の、フォードルが夏を過ごした過去のロシアにある田舎の別荘のことを指しているとも解釈できる。前者のほう、つまり、過去のロシアのものであるというのは、直前のある描写から分かるのだが、その描写に出てくるベンチや並木道は、まさに自伝に出てくるあの、5歳のナボコフ少年が指でなぞったものがもとになっていると考えられる。こうして、我々の出発点であったあの枕の上の透明な指画に、再びたどりつく。

このように、出発点から取り上げて来たいくつものモチーフ・イメージは、どれも複雑に絡み合いながら、やがて最終地点で交わり、我々を出発点へと引き戻す。少年ナボコフが指でなぞった道は、それ以外の、とても指では描ききれないほどの詳細なディテールとともに、大人のナボコフによって言葉の形で再現された。それはおそらく、本当の絵画としては描ききれない要素をも含んでいる。少年の、色も形もない指であったからこそ、また、作家ナボコフの、無色の鉛筆による言葉であったからこそ、表現し得る世界がそこには展開されている。同じように、一見系統だった地図の描けそうな、『賜物』におけるベルリンの地勢図は、紙の上の目に見える地図としては成立しない。どの辻公園も、どの通りも、詳細は丁寧に描き込まれているのだが、それら一つ一つは独立して存在するようで、つながりというものは一向に見えてこないのである。我々の目にする街はあくまで、一つの窓から眺めた、切り取られた、細かな部分に焦点の当たった風景としての街であり、上空から眺めた鳥瞰的な街ではない。しかしそのような細切れの街並みだからこそ、それらを結びつける、目に見えない小道や入口を見つける喜びが、ナボコフの小説にはあふれているのである。ナボコフの読者はそうした、透明の指画や白い鉛筆で密かに描かれた秘密の小道を見つけることを、期待されているのであろう。

論文審査の結果の要旨

ロシアに生まれ、ロシア革命で祖国を去ってからは主にベルリンで亡命生活を送り、さらに1940年にアメリカへ渡ってからは英語作家に転身したウラジーミル・ナボコフの著作は、大きく二つに分けられる。すなわち、ロシア語で書いた1940年以前の作品群と、英語で書いた1940年以降の作品群である。さらに、この両者の作品の多くには主にナボコフ本人による翻訳があり、一つのテキストにはロシア語と英語の二つの版が存在することになって、ナボコフ文学の全体像をつかもうとするときに困難な問題が生じる。その中でも最も大きな問題は作品評価の問題であり、従来ロシア文学研究の立場からは、最初ロシア語で書かれた『賜物』をナボコフの代表作とする評価が一般的であるのに対して、英米文学研究の立場からは、最初英語で書かれた『ロリータ』を代表作とする評価が一般的であった。

ナボコフ研究に存在するこうした大きな溝は、日本におけるナボコフ研究でもまだ乗り越えられたとはおおよそ言い難い。今後、ナボコフ研究者が国際的な水準で活躍するためには、ロシア文学研究と英米文学研究の双方を自由に行き来できる幅の広さを持つことが必須であろう。その意味で本論文は、英米文学研究を修めた論者が、ロシア文学研究の立場からは最高傑作とされる『賜物』を中心とした本格的なナボコフ論に挑んだ、きわめて野心的な試みとして高く評価することができる。

本論文の全体としての特徴として挙げられる第一点は、鉛筆、風景、窓、広場、ベンチ、手紙といった、ナボコフ作品に繰り返し現れる、ナボコフの想像力のあり方を浮き彫りにするようなモチーフ群を取り上げ、それをロンド形式のようにつないでいくことで章から章へと移動しながら、最後にはそうしたモチーフ群を一点に収束させるというかたちで論文全体を締めくくるといえる。あたかもナボコフの小説をなぞるような構成が取られているところである。さらに第二点としては、『賜物』論を中心に据えつつも、ナボコフの自伝『記憶よ、語れ』をはじめとして、ナボコフの主要作品ほとんどすべてについても扱っている点である。そこではたえず、ナボコフのある作品と別の作品が、共通する小さなモチーフによって、従来には論じられることがなかった新しいかたちで結びつけられる。これは論者が、ナボコフのほぼ全作品を深く読み込み、どこでも自由に引用できるほど自分のものになっている証拠であろう。そして第三点としては、主に英語のテキストに依拠しながらも、頻繁にロシア語のテキストを参照し、その両者における微妙なニュアンスの相違について考察を行っている点である。これは、論者がナボコフ研究者として今後進むべき道を十分に自覚していることのあらわれだと評価したい。

本論文の第一章では、ナボコフの想像力の本質を解き明かすものとして、「指で描いた絵」または「白い鉛筆」というモチーフが扱われ、そこからさらに議論はナボコフと絵画という問題に及ぶ。

第二章では、前章に続く「枠によって切り取られた風景」という観点から、「窓」のモチーフが論じられる。とりわけ注意が払われるのは、「列車の窓」というモチーフである。それが『賜物』における「窓」のモチーフへと展開されることで、第三章以降の『賜物』論への準備がなされる。

第三章で論者が注目するのは、『賜物』で主人公の亡命ロシア人フョードルがベルリンの市内で幾度となく出くわす、「広場」であり、そこに置かれた「ベンチ」である。それが同じ「広場」の同じ「ベンチ」なのか、読者には判断がつけられなくなる。そこで描かれているベルリンは、けっして固定したものではなく、小説の進行とともに変貌していく、いわばつねに建築中の都市なのだと論者は結論している。

最後の第四章では、「手紙」というモチーフを入り口として『賜物』の小説世界に入っていくことをきっかけにしながら、フョードルがベルリンを彷徨する、その足跡をたどることで、従来は一種の恋愛小説とも読まれてきたこの小説にまったく新しい解釈を提示して、本論文は締めくくられる。

総じて、本論文には細部の読みにおいて従来にはなかった意義深い発見が多く含まれ、論者の将来性を予感させる。また、本論文の一部は国際的なナボコフ研究のジャーナルに掲載されたものであり、すでに論者がその水準に達しつつあることは証明されていると言えるだろう。ただ、ナボコフとベルリンというテーマについてはドイツにおいて先行研究が存在しており、その咀嚼が充分ではないこと、ロシア文学研究における『賜物』論の過去の蓄積を取り込めていないこと、ロシア語のテキストの読みがまだまだ足りないこと、といった欠点が認められるが、それらはいずれも論者の今後の課題として克服可能であり、大胆な課題に挑戦した本論文の価値を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成二十年二月二十二日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。